

「タップは音楽」タップライブをプロデュースする

マーサメリー社長 **安武 真佐子**さん

「様々なタップライブに挑戦したい」と話す安武さん（東京・赤坂で）



「ひと・人」

Person

タップダンサーをカッコいいなあと思っていた安武さんは、すぐに電話して申し込んだ。

「インスタラクターの先生はとても上手で、タップは音楽だ、と感じました。求めていたものはこれだ、とこになってしまいました」

通ううちに、自分が踊ることよりも、先生のパフォーマンスの魅力を生かしたいと、ライブを勧めてみた。先生も「ぜひやってみよう」という。

「タップは音楽だ、と話してもなかなか理解されない。言葉で話すより、ライブを見てもらうこと」と、

03年7月、活躍中の若手タップダンサー3組を集めてのタップライブ「Tarn Tarn Tap」を実施した。企画、制作、司会進行すべて自分。

「ダンサーの人情がわかるようなインタビュ記事も書いたニュースも自分で作りました」

ライブをやればやるほど、タップへの愛情が深まってくる。ダンサーも期待以上の力を出してくる。

「お客さんは10歳から70歳まで幅広く、初めて見た人も感動してくれました」

さらに、ジャズシンガーなど様々な音楽とのコラボレーションから、オリジナル曲でのライブに取り組みなど、タップ

ある日出会ったタップダンスの魅力に取り付かれ、タップダンスを広める仕事を始めた安武さん。長年、音楽業界で活躍してきたが今では、タップは音楽」として、タッ

## 「ダンサーの魅力開花させる」

プダンサーたちと様々なミュージシャンとのコラボレーションなど、新しいタップの世界を創り出している。

筆したりして約10年を過ごした。帰国後は、佐野元春氏のマネージャーで多忙な日々を送った。

やがて結婚してフリーで

上智大学からアメリカの大学に編入し、クラシック・ピアノを学んだ。卒業後は、ニューヨークに住み、ミュージシャン・甲斐よし

仕事をしていた安武さんはあるとき、カルチャー教室の広告で「リズムムタップ教室」の生徒募集を見つけた。子どものころテレビで見た

millie“ゆき”タップライブ”。99年のことだ。「自分のなかでタップの素晴らしさを信じる気持ちが大きくなり、ライブを続けていこう、と決心しました」先生だけでなく実力のあるタップダンサーは、たくさんいる。だがライブの機会があまりなかった。

の持つ様々な可能性を試して、プロデュースしたライブは30回を数える。「これからもオリジナルティある新しいタップの世界に挑戦して、ダンサーの隠れている魅力を開花させていきたいんです」  
<http://www.masamiary.com/>